



中国僻地における貧困問題研究 —中国白水県李家源村貧困原因分析—

李小春¹

はじめに

改革開放後、著しい経済成長を遂げた中国には相当な物的蓄積が備わっている。中国には巨大なマーケットと豊富な需要が潜在しており、発展の可能性は益々高まっている一方で、都市と農村間の格差はいつそう拡大しつつあるにもかかわらず、困難に満ちた貧困撲滅国家事業は大きな壁に面している。

しかし中国経済の持続する高度成長及び政府主導型の貧困対策という二重戦略の下で、貧困人口の解消に大きな成果を上げたことも事実である。絶対貧困人口²は1978年の2.5億から2007年には1,479万人に減少している³。そのうち1980年代中期スタートした、農村資源を利用して農村の基礎施設を改善する開発型援助という方式が貧困農家の労働及び発展能力に合わせる形で、農村貧困の解消に重要な役割を果たした。開発型援助の成果を満たすには、①貧困人口相対的に集中②貧困人口の自立的な発展能力に依存するという二つの条件が必要である。現在の農村人口は大部分、この二つの条件には達していない。

どんな援助政策でも、農民達に自立的に積極的に貧困を脱出する体制を作るものが評価されるべきだが、今までの貧困開発理論及び実施のプロセスを分析してみると、貧困対策は貧困者自身の精神素質向上による経済成長及び経済発展における役割を無視してきたことが明らかである。貧困対策にしても、開発援助にしても、ある程度にもっとも基本的な事実を背いている。人間自身が生産力の決定的な要素で、経済発展

及び経済の成長が主に人間自身の素質の向上によるものである。政府の角度から見れば、お金をあげ、物をあげ、プロジェクトを立てるといったような開発的な「輸血型」の援助式である。貧困地域及び貧困人口の角度からみれば、資金を待つ、プロジェクトを待つ、或いは、資金をくれというような、プロジェクト争いである。

こういう状況が西部少数民族貧困地域で非常に目立っている。そのため、「教育・科学・技術を通じて生産力を促進する」などの方法で予想の効果をあげられないにもかかわらず、国家援助の科学技術人材、援助資金、援助物質及び国家が設定した援助政策が理想的の効果もあげられなかった。その結果、長期にわたって続く政府主導型の開発援助には貧困人口が国家及び政府に対する「待つ・頼る・要」という依存思想の側面が生まれつつある。何回も何回もの開発援助実施後、一部分の地域が依然貧困であることが貧困原因の探求不十分であることと意味する。

中国僻地における貧困開発によりよい開発援助のあり方を提案するためには、貧困の原因を更に深く広く分析する必要がある。A.センの潜在能力理論の下で、これまで筆者が定点観測調査をしてきたデータを踏まえて中国貧困県白水県収水郷-李家源村の調査を通じて中国僻地における貧困原因の特徴・メカニズムを明らかにしたい。

I 白水県の概況

1 特殊な地貌

白水県は北緯35° 東経109°の間、中国

陝西関中東部、陝西省渭河盆地の北部、橋山、黄龍山の南、洛河の近くにある。面積が 986 平方キロメートル、人口が 27 万人である。白水から蒲城県まで 25km、黄龍県まで 45km、洛河県まで 105km、宜君県まで 80km、澄城県まで 45km、銅川市まで 60km、渭南行政区まで 83km、省都西安まで 165km、首都北京まで河南経由 1,368km、山西経由 1273kmで、渭北黄土台原と陝北高原の移行地帯にある。地勢：西北高、東南低、東南洛河出口海拔 445m～西北史家塔 1543.3mで間の差が 1,093.3mである。殆どの農地が 650---1,000mの高原の間にある。境内には大小河が 14 本あり、そのうち、洛河、白水河という二本の河が一番大きい。白水県は 1982 年に山区県として認定された。2000 年には貧困県として認定されたところである⁴。

2 農業、農村経済及び県域経済

白水県は山区県で、農業及び農村地域の発展が経済発展の中では重要な部分である。全県約 4 分の 3 以上の人口は直接に農業生産に従事し、農業生産高が国民生産高の 50%以上を示している。

経済の発展のプロセスからみれば、殆どの先進国の経済の発展のプロセスの中では農業を離れ、土地を離れ...という特徴があるが、農業は立ち遅れという意味がしない。農業は工業の基礎であり、国民生活にはなくてはならない主な産業である。特に発展途上国においては最も重要な役割を果たしている。県域経済を発展する際、国家政策と実際の状況に合わせて、地域優位性を発揮し、農業の発展を促進する。農業経済の発展プロセスをみれば、下記のいくつかの段階が分けられている。伝統農業段階・多種経営段階・現代化商業農業段階・生態化農業段階

白水県の農業の発展からみれば、部分的な伝統農業から商業化農業への転換及び共存、生態化農業へ移行し始める。現在、白水県伝統農業が依然、一定の比重を示している。主に食糧生産の面である。

白水自給自足の伝統的な農業段階が主に 80 年代中期以前で、この段階は農民の労働工具を改善されたが、伝統農業の影から脱出することが出来なかった。農業機械化・肥料、農薬・灌漑が各郷・鎮まで使われているが、全体的には、牛で耕す、人力収穫を主とした伝統的なやり方だった。80 年代中後期、農民達は小麦、玉蜀黍、さつまいも、粟類、高粱、大豆等の食糧以外に、火で乾かした葉煙草、林檎、綿花、油菜、西瓜、サンザシ、棗、胡桃、栗、山椒等の経済作物及び药材を植え始め、同時に牧畜業(牛、羊、豚、鶏等)をし始め、山々の中には天然な牧場が生まれた。

白水県の林檎が長い歴史を持っている。50 年代中国政府の「保護と回復を主に、積極的に山果樹を発展する」という呼びかけに応じて、スタートして、当時、果樹園が 18 ヶ所しかなかった。面積は 354.6 ムであった。60 年代、70 年代の発展につれて、白水県の林檎面積は 2 万ムに達成し、80 年代、渭北百万優質林檎基地県の一つとして知られるようになった。90 年代初期、増加し始め、白水県の林檎面積が大幅に 1992 年の 23 万ムから 1996 年の 40 万ムまで増加し、一人当たり 1.7 ムで全国の頭に立つようになった。1995 年 4 月「中国林檎の故郷」という光栄称号を獲得した⁵。

2008 年城鎮居民平均一人当たり可処分所得は 10,464 元で、一人当たり平均農民純収入は 2,520 元まで⁶上昇した。市場経済は白水人の福音と言えるだろう。

3 白水県の格差問題・貧困問題

改革開放後、白水県の人々は、昔に比べれば、確かに豊かになってきたが、白水県の農村経済の発展は非常にアンバランスで、西北部、北部、東北部の発展が非常に立ち遅れている。政府主導開発型・世界銀行プロジェクト・社会援助によって農民の生活状況、特に住宅・水の状況・交通状況・電気等の面がだいぶ改善されつつあるが、一旦貧困から脱出した人々が家庭の原因、天災の原因等によって、再び貧困に舞い戻す

現象をよく見かける。近代化の中では県内、郷内、村内における格差問題も益々深刻になってきている。山の奥における貧困問題が依然深刻である。2006年以來の農村調査の中では物質貧困から精神貧困へ転換しつつあることをしみじみに実感させられた。

土地は農民にとっては生命そのもので、近代化していく過程で荒廃しつつある。農民精神⁷も荒廃しつつ、人間の助け合う気持ちも薄くなりつつ、高齢者の扶養意識も薄くなりつつあること、貧困の根本的な原因は農民素質⁸が低いことにあることを王溝村調査(李 2007 修士論文)で明らかにした。信じられないことに、2009年9月の調査では自分の畑の土を売る現象が現れている。この現象は、農民精神の荒廃のしるしでもある。

農民精神が荒廃しつつある中で、「扶助移民開発」を県政府が主要な貧困対策として力を入れているが、これに関しては異議を持たれている。①本当に移民は貧困開発の上策であるか。②主体としての農民を無視して貧困の問題を解決できるか、という疑問である。

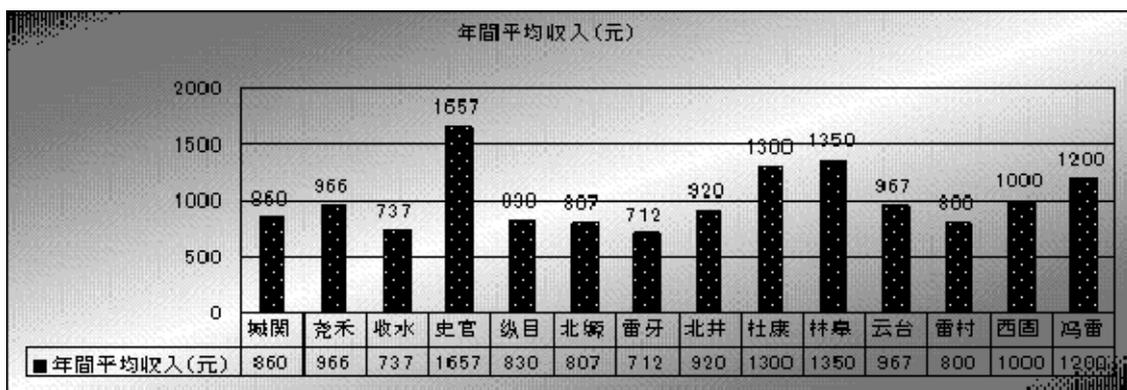
2009年3月、白水県の扶助事務所が「扶助移民開発」を実施するために、白水県の

各地域の特貧困地域-尧禾鎮、収水郷、史官鎮、縦目郷、北源郷、雷牙郷、北井郷、南井頭、杜康鎮、林皋鎮、雲台郷、西固鎮、冯雷鎮、雷村鎮という七つの鎮、七つの郷、合わせて44個の典型的な貧困自然村の生活状況に調査を行った。幸いに調査同行のチャンスに恵まれ、沢山の農民達の話聞かせてもらって、同じ鍋のご飯を食べて、その土地に立って、その風景をじっと見つめて感じたのは、豊かな資源が開発してくれる人々を待っているということだった。

調査の中では数字化できない部分が沢山ある。言葉で表現できないところが沢山あるが、数字化できない部分にしる・表現できる部分にしる、経済学の研究の範囲であるべきだ。なぜならば、農民の考え方、意識、精神、行為等が客観的な存在だけでなく、農民が豊かになれるかどうかには大きな影響を与えるからだ。原因の究明には、現地の農民の顔をじっと見つめないとならないということを実感した。

下記は移住調査村の年間一人当たり純収入のグラフである。

図 2-1 各郷・鎮の貧困村の一人当たりの平均年間純収入



出所：2009年3月白水扶助事務所移住調査データに基づいて筆者作成

上記のグラフからどんな地域でも貧困問題があるにもかかわらず、貧困村の中でも貧困度合いがばらついていることを所得で

示している。所得だけで貧困を説明するのが非常に物足りないのであるが、白水県の発展がアンバランスであることが一目瞭然

である。

2009年3月の調査資料によって、貧困の原因がいくつかまとめられた。

1. 交通・情報による農産物の流通難
2. 農業基礎施設が非常に粗末
3. 農民思想が古く保守，現状に満足，新たな思想を受けにくい。科学技術を利用する意識及び能力が制限され，生産技術遅れ，規模生産性低下，受教レベルが低く，高校生が15% 中学生が40% 小学生が25% 文盲が20%
4. 村に残されたのは老人，病人，障害者及び子供が主で，労働力の殆どは出稼ぎに行っている。
5. 潜在能力の欠如による様々な貧困(愚かによる貧困，病気による貧困，災難による貧困，進学による貧困，農民精神荒廃による貧困)は悪循環になっている。

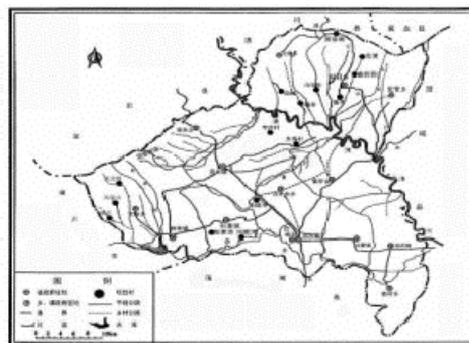
白水県の経済発展及び政府主導型貧困開発・世界銀行無償援助・社会援助を通じて，白水県各地域の農民の生活条件が改善されつつ，各地域のインフラストラクチャを整備されつつあることも事実である。東部地域からの社会援助も盛んである。教育施設の整備，生産資金，就業チャンス，医療衛生，社会保障をだんだんに整備されつつある中ではなぜ，白水県の貧困問題が依然深刻なのだろうか。下記は世界銀行援助プロジェクトの地図である。●は，2006年から世界銀行の投資村の地域である。プロジェ

クト総投資1,200万元だ。県政府の話によると実験村の選定理由は，貧困状況+貧困村が集中しているところである。プロジェクトを通じて，村のインフラストラクチャを整備された。これまでの開発援助から見るとこれまでの対策が主に物質貧困に対するのである。農民自身の原因による貧困に対する対策が殆ど見られないのが現状である。

A・センは，貧困を所得だけで焦点をおいて分析することには批判的であり，基本的なケイパビリティが与えられていない状況として貧困を見ようとする。なぜならば，個人個人の違い，生活環境の違い，社会状態の違い，消費慣習の違いなどによって，所得を生きるための能力に交換する度合いに差が出てしまうからである。A・センは「財の特性を機能の実現へと移す変換は，個人的・社会的な様々な要因に依存する」(「sen1985:邦訳」)

根本的には貧困者に貧困脱出させるために，貧困者自身のことを更に分析する必要がある。

われわれが直面する大きな問題は貧困層の持つ資源⁹が活用されない現実である。貧困層が資源を持っていても活用されにくい背景には，少なくとも，三つの直接的な理由がある。第一に，「資源」の存在自体が認識されない。第二に潜在している「資源」を活用するアイデアがない。第三に，今まで生活に満足している¹⁰。地図で分るように相対的に貧しく，孤独な収水郷-李家源の貧困問題を取り上げて分析していきたい。



II 李家源村の貧困問題

2009年9月～10月まで白水県収水郷李家源村に聞き取り調査を実施した。李家源村は上記の地図から分るように中国陝西省白水県の黄土高原にある八つの自然村からなっている。

李家源村は山の奥にある村で、県政府から40キロぐらい離れているところにある。

総面積が4900ム、海拔が578.4～1181メートル、年間平均気温が摂氏9.7度、年降雨量が578ミリメートルである。農業は二期作で、夏は小麦、秋は玉蜀黍、さつまいもである。副産業は林檎の果樹園、家畜、山薬材、胡桃、豆類である。下記の四枚の写真で、李家源村の人々の生存状況・農業状況・自然環境が説明できると思われる。

図 3-1 李家源山門村自然村全貌



図 3-2 李家源村の伝統的な農耕風景



出所：2009年10月筆者撮影

図 3-3 山門村土窯洞住宅



図 3-4 山地畑風景



出所：2009年9月筆者撮影

李家源村の各自然村の生活風景が上記の写真で示すように近代化の中で閉じ込められた典型的な村の姿である。外の交流の少ない村人との話の中ではつくづく感じたのが、外に出るのが非常に恐れていることとこれからの生活が非常に不安であることと、畑があると唯一乞食にならずにすむような心理状態だった。これまでの移住政策¹¹から見ると貧しい人々の移住することが出来

るのだろうか？移住後の生活が大丈夫なんだろうか？このような村の人々を国が出金して移住しようとするのだが、このようなところは本当に発展の可能性がないのか？移住で李家源の貧困者が貧困から脱出する可能であるか？貧困の真の原因は何なのだろうか？

下記は李家源村の調査結果である。

表 3-1 収水郷李家源村の基本データ

	戸数	総人口	総面積	女性	0-12 歳	障害者	文盲	65 歳以上	出稼ぎ	幹部数
	(戸)	(人)	(ム)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)
馬家	37	145	860	69	3	6	11	13	8	3
袁家	18	64	720	29	4	2	6	4	2	2
胡家	20	65	680	27	2	3	8	2	1	1
石家	13	40	670	14	1	4	7	7	1	1
山門	12	31	320	11	0	4	8	4	0	1
上源	13	40	430	19	2	3	6	2	1	1
下源	15	62	470	34	3	2	7	4	1	1
王溝	24	74	750	37	4	4	11	6	3	2
合計	152	521	4900	240	19	28	64	42	17	12

2009年3月アンケート調査によって筆者作成

表 3-2 収水李家源村の特徴

	女性率	0-12 率	障害者率	文盲率	老人率	出稼ぎ率	一人当たり純収入 (元)	貯蓄 (元)
馬家	48%	5%	4%	8%	9%	6%	1500	45000
袁家	45%	6%	3%	9%	6%	3%	1450	27000
胡家	42%	5%	5%	12%	3%	2%	1300	20000
胡家	35%	3%	10%	18%	18%	3%	750	30000
山門	35%	0%	13%	26%	13%	0%	600	10000
上源	48%	3%	8%	15%	5%	3%	800	20000
下源	55%	4%	3%	11%	6%	2%	950	40000
王溝	46%	1%	5%	15%	8%	4%	850	30000

表 3-3 李家源村の交通状況

土地状況					交通状況		
	耕地	果樹	森林	草地	県まで (キロ)	郷まで (キロ)	交通工具
馬家	240	181	300		20	10	バイク・自転車
袁家	335	105	200		20	10	バイク・自転車
胡家	138	120			22	11	バイク・自転車
石家	123	67			24	12	バイク・自転車
山門	150	24.3			28	13	バイク・自転車
上源	91	86	190	210	48	22	バイク・自転車
下源	190	110	100	60	48	22	バイク・自転車
王溝	312	45	66		20	20	バイク・自転車

上記の表が李家源村の八つの村の総合状況で、全体的には見てみると女性の数が少なく、子供の数が少なく、文盲率がわりに高く、出稼ぎの数が少なく、障害者及び老人の比率が相当にあることが村の特徴である。村から県まで、郷まで、非常に不便である。

その中では最も目立っているところが山門村である。女性の比率が 35%しかなく、0-12 歳の子供が 0%，障害者の比率が 13%，文盲率が 25%，老人が 13%，出稼ぎが 0% である。子供の数が 0 の村の行方を想像してみなくないのである。子供が国の未来とよく言われている。女性が少なく、子供がいなく.... 村の未来がないと言わざるを得ない。村には人的資源欠如が明らかである。

山門村の土地面積から見れば一人当たり 10 ム (67 アール) ぐらいあるが、純収入が八つの村で一番低い。ご飯のない日がないが、非常に苦しい生活をしていることを肌身に感じさせられた。そこで五日間村人と同じ鍋のご飯を食べて生活した。静かなところ、環境が綺麗なところで精神的には癒されるところを感じながら、現代人想像できない生活の苦しさ及び困難さを体験した。これは典型的な貧困村で、山の奥に閉じ込められ、朝から晩まで畑で働いている伝統的な農業のパタンである。人々の考え方が非常に古いか愚かか単純か無知か...時代はずれと言う印象だった。市場経済の影響を全く受けてないことだと言えないが、非常に少ないことがいえる。貧困開発 30 年にわたる山門村のような村が完璧に存在していることに非常に悲しい気持ちで一杯だ。村の幹部の話によると政府がここをあきらめて移住しようとする。移住では、この問題を解決するのだろうか？移住では、村に未来を上げられるのだろうか？

山門村では

①結婚の年齢になった男達が結婚できないことと女の子が結婚の年齢になると村を出ることが非常に目立っている。

なぜかと聞いたら、「貧乏だから、誰でも俺の嫁になってくれない。」「なぜ、出稼ぎに行かないの？」と聞いたら「あまり学校

に行っていないから、外に行っても仕事を見つけれないし、外に行ったら、母親の面倒を見る人がいない、なんか外に行くのがちょっと怖い」と言った。「自分の土地・山を利用してお金持ちになったら、みんな喜んで嫁に来てくれるだろう」と言ったら、「無理だ。どうしたら、いいかわからないのだ。技術もないし、お金もないから、もし、もっと損だったら、大変じゃない？今のままで安心でいいのよ」と言った。「なぜ、女の子が大きくなると村を出るのか」と聞いたなら、「私は家族のために家をでるの？私は外に出るのが夢だ。私は家を出ないと兄がお嫁さんをもらえないのだ...」

ルイス (1994 p 184)「新思想」即ち、人々の競争、創造、冒険などの意識、市場経済の中で現れた新事物に対する認め態度、受け入れ態度.... 市場経済の新思想を持つ人が「新人」というのだ。「新人」のみで経済のチャンスを掴むことができる。(1994 p 178) 経済成長は人々の競争、創造、冒険等の新しい思想が要求される。このような新しい思想が一旦、人の行為に転換したら、人々が経済機会を得る前提条件になる。経済機会と新思想の役割が相互的である。¹²

山門村の発展及び貧困からの脱出は、新しい思想を持つ人々の育成が必要ではないか。

山門村では優秀な幹部 35 歳、村の組長のお話を聞かせてもらった。彼が 4 人家族で、年間平均一人当たりの純収入が 5000 円で、貯金が 10,000 元である。彼が私の調査に非常に理解してくれてフォローしてくれた。彼が高校卒業で非常に有能な人であることがお話で分った。「ここに調査しに来る人が少なく、調査してないのに、だめだと結論を出している」と彼が言った。彼が 24 ムの果樹園・30 ムの畑・羊・牛・豚という牧畜業を営んでいる。「こんな優秀な人なのに、なぜ、村を出ないのですか？出稼ぎしたら、もっとお金持ちになるんじゃないですか」と聞いたら、「ここでの農業がとてもやりがいのある仕事だ。今年があまりでき悪くて一人当たり平均 5000 元ぐらいだ」といった。

彼の話では、ここが自然環境悪いとよく言われるが、実はここは資源が豊かなところだ。気候が林檎に良いし、山が牧畜業に良いといった。みんな移住したら、みんなの土地を一人で受けてここでやるつもりだといった。

「あなたはこの村の村長じゃないか？なぜ、自分ひとりで走っているの？みんなを連れて一緒に頑張らなくちゃ」と言ったら、「ここはね、難しい、みんなあまり外との交流がなく、考え方が非常に古いのだ。みんなの力を合わせて合作化の道が作らない、と村の貧困の脱出が非常に困難である。資源を共享して始めて豊かになれると彼が言った。

中国の農村問題の解決をするために、先進国の経験を借りたいという気持ちで去年の八月に沖縄の東村の周りの共同売店に足を運んだ。共同売店は沖縄の発展及び人々

の生活などに大きな役割を果たしてきたのである。山門村のような村では共同売店が必要ではないか。沖縄に続く共同売店は独立型共同体における共産体制下に生まれた概念であり、村落共同体構成員の生産体制、消費体制の核として意義があったのではないか。李家源村は面している問題が、人的資本欠乏である。農村経営する管理者が必要である。共同売店の経営を通じて山の奥に閉じ込められた李家源村のような村の貧困脱出に大きな貢献ができるのではないかと考える。環境保全に対する無知、経営に対する無知、農業技術に対する無知、外の世界があまり知らない村人たちに共同売店の設置を通じて情報が流れるようになる。農民たちの意識改善にきつとつながるだろうと予測される。

李家源村ではこういうような単身の老人の家庭が目立っている。

図 3-5 単身老人家庭



出所：2009年10月2日筆者撮影

67歳の五保戸：「毛沢東時代のここは非常に貧しかったよ。いつもお中が空いていて大変だった。鄧小平時代になるとご飯のない日がなくなった。よかったね！」と言った。「なぜ、結婚しなかったのか」と聞いたら、「誰も結婚してくれなかった。貧しいものだと分かっているのに、誰か自分の娘を火の穴に捨てるか、あなただったら来る？」と笑いながら言った。「若いときに非常に苦勞したなあ。この手を見て、骨が太くなってるだろう、これは水による風土病なんだよ。今はもうないんだ。ええ、今は

ね、年をとってね、あまり働けなくなっちゃった。家族がいないので、政府から月に100元をもらっているし、自分の土地を人に貸して、ムあたり200元をもらっているの、これぐらいのお金で、生活するのが十分である。幸せは幸せだね、村のリーダーがとてもいい人で、ワシの土地の面倒を見てくれてよかった。ただ病気の時に大変だ。一人で生活するのがとても不安だ。この前、移住の話聞いたが、ワシだって、どこに行っても一人で、どこに行っても面倒を見てくれる人なんかいないよ。話によ

ICCS Journal of Modern Chinese Studies Vol.2 (1) 2010
 も少ないのが現状である。中国農村では無数に近い要介護老人があるに違いないが、その実態は不明である¹³。

今回、李家源村の調査では、平均で 8% の老人¹⁴比率で、一番多い村では 13% を示している。白水県では敬老院が一軒あるが、なかなか入れないのが現状である。膨大な高齢人口の問題を解決するのがこれまでの家庭養老という形が依然、必要である。なぜならば、社会の受け入れ能力が制限されている。中国農村の伝統的な養老の仕方の中では新たな制度を採求する必要がある。農村では、社会保障制度から社会保護制度への転換が必要ではないかと考える。

李家源村の八つの自然村の中では、老人問題だけでなく、障害者問題による貧困が目立っている。特別貧困者の家庭を統計してみた。

ると県には養老院があるそうだが、数が少ないが入れないよね。」と言った。

その日は老人が自分でご飯を作りながら、いろいろな話をしてくれた。その風景を見て病気の時の大変さが想像できる。中国には農村に設けられた公的老人福祉施設敬老院があるが、これらの中には日本でいうデイ・サービスを含む施設と入居型専用施設とがあったが、経営は村民委員会、郷、鎮あるいは県が行う例が多く、財政負担は本人家族またはこれらの公的機関との共同負担である例が多かった。入居者の収容規模は殆どの施設が 100 名以内で、入居年齢層は 70 歳以上が大部分である。そこに入居できるものは比較的富裕層に限られる。制度上はいわゆる五保制度（衣、食、住、医療、葬式の五つを保障する制度）による救済資格者に該当するが、実際には膨大な高齢者人口に比べて、高齢者施設の数はあまりに

表 3-4 李家源村の特別貧者の状況

		家族構成	原因	年間一人当たりの純収入
馬家	家庭 1	2	妻精神病	1000 元
	家庭 2	4	妻精神病	500 元
	家庭 3	2	障害者	800 元
袁家	家庭 4	4	障害者	700 元
	家庭 5	1	精神病	400 元
胡家	家庭 6	3	老人+妻病気	300 元
	家庭 7	3	老人病気	800 元
石家	家庭 8	4	病人有	800 元
山門	家庭 9	4	老人・子供で稼ぎ	600 元
	家庭 10	1	85 歳+病気	400 元
上源	家庭 11	3	知力低下・体不自由	600 元
	家庭 12	2	障害者	900 元
下源	家庭 13	5	病人有	700 元
王溝	家庭 14	2	怪我による体不自由	300 元
	家庭 15	1	障害者	400 元
	家庭 16	6	病人	600 元

出所：2009 年 9 月現地調査による。

上記の統計から見れば、個人欠陥による貧困が非常に目立っていることがわかる。また、上記の分析で分かるように様々な原因の中では家庭・個人欠陥・精神素質の欠如による貧困が今日の農村の大きな特徴である。政府の移住政策で李家源村の貧困問題を解決することは可能か。筆者の結論は不可能だというものである。その理由は、

第一に、貧困状況に置かれている人々は現在の所得で移住するのが不可能である。

第二に、移住という政策が農民の生活環境の改善における役割を無視することが出来ないが、貧困脱出に対して一時的な効果を与えるが、自立的に市場経済の中では生き残れるかどうか懸念している。「わが国の東西部地域の最大差が経済の発展レベルではなく、人の思想観念である。こういう思想観念が経済発展の束縛の根本的な原因である。実は、西部の沢山の地域では、自然資源、国家政策等にかかなり恵まれているが、立ち遅れる状況が改善されなかった。その理由が考え方である¹⁵。」「貧困が怖くないが、怖いのが貧困者自身の思想及び精神の崩壊である。貧困の原因が一般的なものではなく、人間低下の思想観念素質である¹⁶。」

第三に、人的資源欠如の村は、土地が離れて、生活するのが非常に困難である。貧困は、経済の階級構造の中で、その人が占める位置や其の経済の生産様式に依存する。ある人の飢餓を回避する能力は、その人の所有物及びその人が直面している交換権原写像¹⁷に依存して決まる¹⁸。ある人が所有している財の組み合わせ（労働力を含む）を所与とすれば、その人の交換権限を決める要因は次のようなものがある。

- ① 雇用先が見つかるか見つかるならば、雇用期間と賃金はどれぐらいか。
- ② 労働力以外の資産を売ってどれぐらいお金を稼げるか、ほしい物を買う費用はどれぐらいか。
- ③ 自ら労働力と購入、管理可能

な資源（ないし資源サービス）を用いて生産できるものはないか。

- ④ 生産に用いる購入資源（ないし資源サービス）費用と販売可能な生産物から収入
- ⑤ 受領資格のある社会保障給付と支払わねばならない税金など¹⁹

第四に、近年の調査の中では、怠け者がよく見られるが、近年の貧困にかかわる研究の結論の中では殆ど見られないことに興味深い。「怠け者」による貧困を移住で解決する見込みがないのである。西欧の貧困研究において、貧困は「怠惰」や「浮浪」といった概念と結び付けられる形で論じられてきた。²⁰

上記の分析から見ると移民という政策は李家源村の貧困問題の解消に対して効果が見られないだろうと予測できる。李家源村では本当に発展の可能性がないのか、分析してみたい。

われわれが直面する大きな問題は、「貧困層の持つ資源が活用されない現実」である。貧困層が資源を持っていても活用されにくい背景には、少なくとも二つの直接的な理由があると考えられる。第一に、「資源」の存在自体が認識されない。第二に、潜在している「資源」を活用するアイデアがない。

「すでにある資源」を可視化して活用するために貧困層の持つ資源を、貧困でない人々の活動と「結びつける（結合する）」ことであった。様々な学問領域が対話する過程で、貧困層の持つ資源と貧困でない人々の活動との間の、新しい「結合」の姿が見えてくることかきたされる²¹。

中国では山の近くにいる人々が、山で、生きる、水の近くにいる人々が水で、生きる昔から言い方がある。自分にはないかあるか、それをきっかけで豊かになれるか考える必要がある。閉じ込められた李家源村には自分の一品を作り上げたときに、貧困脱出の光が見える。李家源村には、豊かな自然資源を持っているにもかかわらず、

有能な幹部チームも持っている。

表 3-5 白水県の生態環境及び林檎の最適生態環境比較

	緯度	平均温度	降水量	無霜期
林檎の最適な生態環境	32~42 度	8~14 度	500mm 以上	170 日以上
白水県の生態環境	35~35 度	11.4 度	570~590 間	207 日

1 李家源村の自然資源

① 地理資源：土壌，気候，地形，水，林檎，牧畜

(1) 優位性のある生態環境及び林檎

a.気候優勢：李家源は渭北高原区，温帯季節風半乾燥気候に属している。

平均温度：10.3~10.6℃

無霜期：194~198 日

b.地理優勢：西北黄土高原は林檎発展の最適な地域である。

c.耕地，土壌優勢：土壌調査資料によると白水県では林檎の発展潜在能力に恵まれていることである。²²

d.地形優勢及び牧畜業：草地，坂草地も多く，農産作物の種類も多い。そのため，牧畜業の発展に適している。

2 李家源のこれまでの実績

李家源村では，すでに現地の資源を利用して豊かになっている人々が存在している。豊かになっている人々の状況を分析してみると李家源村の貧困の原因も再び証明されるのである。

この分析からみると殆どの幹部が高卒で，純収入が平均で，4000 元ぐらいで，県の平均より倍以上高いことが分かる。村の貯蓄は殆ど幹部たちのところに集まっていることが明らかである。私は村主任のお宅で，食事を五回ぐらいしたことがあるが，真夏で畑で働いている姿を見て，本当に感動された。幹部たちが自分の家庭をうまく経営しているのが上記の統計で証明されるにもかかわらず，そこには発展の可能性があると言える。ただ，幹部たちは，自分の家庭経営に専念していることが感じされた。村の人々に，失望して，あまりにも放棄して

いるのが事実である。貧困地域のリーダーシップ，チームワークの力を発揮することによって，村のボトムアップとつながるのではないか。

李家源村の貧困脱出できるように有能人たちに激励する必要がある。これまでの私たち第三者の貧困開発研究の中では手の届かないところで，現地の人々が積極的に現状を把握したり，対策したりする人々が出現できれば，貧困開発の福音である。貧困者自身で自立的に貧困脱出できるようにするのが私たちの研究者の役目であると私は考えている。

まとめ

中国僻地における農村での長期間にわたるフィールドワークを通じて貧困の特徴は下記のようにまとめることができる。

第一に，外との交流の少ない僻地における精神素質の欠如及び人的資源欠如が農産発展の束縛の第一の特徴である。

第二に，高齢化による問題は益々深刻になっていくのが第二の特徴である。

第三に，個人的欠陥²³による問題は農家の貧困脱出の大きな壁になる。

第四に，リーダーシップ，チームワークのない村は貧困から脱出するのが困難である。

つまり，貧困問題は非常に複雑な問題で，原因の究明が非常に困難であることを再び実感させられた。調査の難しさは想像以上である。信じてくれないところ，政治スパイと思われるところが正直で非常にショックであった。しかし，問題の解決は原因の究明が第一歩である。理論は実践から実践への螺旋上昇循環である。

表 3-6 李家源村の幹部状況

	性別	学歴	年齢	職務	家族数	一人当り純収入 (元)	貯蓄 (元)	出稼ぎ	農民貧困の原因 (幹部の生の声)
馬家	男	高校	49	村主任	4	6,000	30,000	1	頭が石で作られている。山は羊・牛・鶏等を飼うのに恵まれているのに、
袁家	男	高校	40	組長	5	3,000	20,000	0	黙守性はなかなか。教育が必要だ。みんなばらばら、まとまらない状態だ。
胡家	男	中学	62	組長	2	3,000	10,000	0	食べるものがあるから、あまり意欲がない。なんか物足りない。
石家	男	高校	39	組長	4	4,000	25,000	0	どうやるか分らないみたい。説明しても理解してくれない。大変だ。子供が何人かいると死んでしまう。
山門	男	高校	37	組長	4	5,000	10,000	0	人的資源欠乏・責任感がない・家庭の原因・自然環境。こういうようなところは、個人個人でやるのが非常に難しい。みんなの力でやらないと貧困の脱出が非常に困難である。合作化が必要かなあと言った。
上源	男	高校	45	組長	5	4,000	10,000	1	天災があると大変だ。貧困から脱出してもまた貧困に落ちる。
下源	男	高校	45	組長	7	3,000	20,000	1	情報が必要で、みんな移住しても俺はここで農業をやる。
王溝	男	高校	50	組長	2	5,000	15,000	2	考え方が古い、新しいことに対するチャレンジの勇気がない。

- ¹ 愛知大学中国研究科博士後期課程。
- ² 所得が貧困ラインを下回る人々である。中国の貧困標準：1986年中国政府が農村6.7万戸居民家庭消費支出に基づいて作ったものである。
- ³ 党的十七届三中全会中共中央关于推进农村改革发展若干重大问题的决定学习辅导「m」北京：学习出版社 2008p188-189
- ⁴ 「白水県志」1989白水県志編集委員会、西安地図出版社 p 66 筆者翻訳
- ⁵ 中共白水県委員宣伝部李小均の口述
- ⁶ 2008年白水県統計局資料
- ⁷ ここでは精神の豊かさということをする。勤勉、勇敢、自立心、やる気、社会とのつながり、道徳素質、思想素質等
- ⁸ 自然環境、社会環境、歴史的要因、教育欠如、不平等などという様々の要因による精神的欠乏
- ⁹ ここの「資源」は主に天然資源・人的資本・インフラストラクチャ・知識資本・制度・人間の創造性等の総合的潜在能力を指している。
- ¹⁰ 下村恭民+小林誉明編著 2009年貧困問題とは何であるか 佐藤仁の序章 貧しい人々を持っているか：勁草書房「を参照。
- ¹¹ 2008年までは「5+1」という政策で国が1軒の農家に5000元+一人ずつ1000元の資金を提供して移民援助。2009年新政策：一人ずつ3800元の資金を提供する。特別貧困戸に一人ずつ3800元を提供する以外、10000元を提供する。
- ¹² 刘易斯（梁小民）『经济增长理论』上海：上海三連书店，上海人民出版社 1994年
- ¹³ 高橋五郎『中国経済の構造転換と農業』 p 102
- ¹⁴ 65歳以上
- ¹⁵ 梁小民『小民談市場』[m]広州：広東経済出版社 2002p74-75
- ¹⁶ 秦其文『財貿研究』2008年2月「农民思想道德素质与农户家庭脱贫的关系研究」
- ¹⁷ 交換写像とは所有する財の組み合わせ一つ一つに対して交換権原の集合を関連付けるものである。

- ¹⁸ セン（黒崎卓、山崎幸治訳）『貧困と飢饉』 p5⁹⁻¹³岩波書店 2000年
- ¹⁹ セン（黒崎卓、山崎幸治訳）『貧困と飢饉』 p 52
- ²⁰ Daris,s, (1980)「The concept of poverty in the Encyclopedia Britannica from 1810 to 1975」 Labor History ,Vol,21, NO,1:91-101
- ²¹ 下村恭民+小林誉明『貧困問題とは何であるか』 2009p272
- ²² 安助『白水発展戦略』西安雄風広告公司製作 1997
- ²³ 文化的、体の欠陥を指す。

参考文献

- [1] アマルティア・セン（黒崎卓・山崎幸治訳）『貧困と飢饉』岩波書店 2000年
- [2] アマルティア・セン（池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳）『不平等の再検討』岩波書店 1999
- [3] アマルティア・セン（石塚雅彦訳）『自由と経済開発』岩波書店 2000年
- [4] アマルティア・セン（鈴木幸太郎訳）『福祉の経済学』岩波書店 1998年
- [5] アマルティア・セン大石りら訳『困の克服—アジア発展の鍵はなにか』訳集英社新書 2000年
- [6] アマルティア・セン（鈴木幸太郎・須賀晃訳）『不平等の経済学 - 潜在能力と自由』東洋経済新報社 2002年
- [7] アマルティア・セン（王庭健・川本隆史訳）『合理的な愚か者・経済学＝論理的探求』勁草書房 1989年
- [8] アマルティア・セン（志田基与師監訳）『集会的選択と社会的厚生』勁草書房 2000年
- [9] ピアソン委員会報告（大来佐武郎監訳）『開発と援助の構想』日本経済新聞社 1981年
- [10] グレアム・ハンコック（武藤一羊監訳）『援助貴族は貧困に巣喰う』朝日新聞社 1992年
- [11] ロバート・カッセン（開発援助研究会訳）『援助は役立っているか』国際協力出版会

1994年

- [12] 絵所秀紀『開発と援助・南アジア・構造調整・貧困』同文館 1994年
- [13] 張玉林『転換期の中国国家和農民』農林統計協会 2001年
- [14] 渡辺利夫『社会主義市場経済の中国』講談社 1994年
- [15] 巖善平『農民国家の課題』名古屋大学出版会 2002年
- [16] 費考通『志在富民・中国郷村考察報告』上海人民出版社 2004年
- [17] 中兼和津次『改革以後の中国農村社会と経済（日中共同調査による実態分析）』筑波書房 1997年
- [18] 刘易斯（梁小民）『经济增长理论』上海：上海三連书店，上海人民出版社 1994年
- [19] 下村恭民+小林誉明『貧困問題とは何であるか』佐藤仁の叙章「貧しい人々はなにを持っているか」 2009年
- [20] 河上『貧乏物語』大内兵衛「現代日本思想大系河上」筑摩書房、なお岩波文庫出版 1965
- [21] 大塚啓二郎+黒崎卓『教育と経済発展・途上国における貧困削減にむけて』 2003年
- [22] 佐藤元彦『脱出貧困のための国際開発論』 2002年
- [23] 高橋五郎『国際社会調査』農林統計協会 2007年
- [24] 高橋五郎『中国経済の構造転換と農業』日本経済評論者 2008年
- [25] Daris, s、(1980)「The concept of poverty in the Encyclopedia Britannica from 1810 to1975」 Labor
- [26] 梁小民『小民谈市场』M 广州广州经济出版社 2002年
- [27] 秦其文『財貿研究』「农民思想道德素质与农户家庭脱贫的关系研究」 2008年2月